



ひらた・たけお 1960年1月、大阪府生まれ。82年、横浜国立大から通商産業省（現・経済産業省）に入省し、エネルギー政策などを担当。91年から94年まで外務省に出向し、在ブラジル日本大使館1等書記官に。地球環境サミットなどに組みながら、W杯の日本招致活動を進めるなどした。2002年から06年まで、日本サッカー協会の専務理事。現在は早大大学院でスポーツビジネスを教える。最近では桑田真澄（元パイレーツ）らを指導。近著に『サッカーという名の戦争』。

新しい南ア世代期待

W杯を語る

前日本サッカー協会
専務理事

平田竹男さん(50)

大きな力を持ちつつある。中国の太陽光発電の会社や、インドのIT会社の看板も印象的だった。

今回の日本代表は、2004年のアテネ五輪世代が中心になった。私が日本サッカー協会専務理事を務めていた時には「谷間の世代」とあきらめかけられていた選手たちだ。この世代に特に力を入れて良かったとあらためて思う。

専務理事時代には、ウルグアイやパラグアイとのマッチメイクを大事にしていた。日本が上を目指すためには必ずこのレベルの戦い方に慣れる必要がある。今後もうこういう国とのアウェーでの試合を行うべきだ。日本は来年の南米選手権に招待されている。次回W杯がブラジル開催であることを考えても、南米対策は強化しなければならぬ。

私は日本が銅メダルを獲得した68年メキシコ五輪をラジオで聴いた世代だ。放課後は突然みんながサッカーをするようになった。その後のサッカー界はJリーグ世代、02年日韓W杯世代を生んですその野を広げてきた。そして今回、日本代表の活躍に感動した子供たちの「南ア世代」が新しく仲間入りした。彼らが今後の日本サッカー界の発展の基礎を作ると期待したい。

16強入りした日本も、これからが大切。Jリーグのクラブは、それぞれがビジョンを持ち、選手育成や地域貢献をしてほしい。12月には、18年と22年大会の開催地が決まる。日本は22年大会に立候補しているが、ぜひ当選して02年の感動を再び味わいたい。そうなれば、さらに次の世代へつなげていく。

こないだいいサッカーが勝ったのは記憶にない。スペインはすごい。オランダでさえかなわなかった。

決勝をスタジアムで見たのは、5大会連続になった。最も印象的なのは、初めて見た米国大会（1994年）のブラジルーイタリア。両者無得点で、史上初のPK戦にもつれ込んだ一戦だった。

ブラジルは、外交官として日本大使館で勤務した思い出の国。優勝した時は、とても興奮した。主将のダウンガの闘志あふれるプレーが印象的だった。あれから16年が過ぎ、ダウンガは監督になってW杯に帰ってきたけど、準々決勝で敗れて残念だった。

スペインやオランダのように、今大会は育成に定評のあるクラブを有する国の活躍が目立った。スペインはバルセロナ、オランダはアヤックスの下部組織出身の選手が代表に多く選出されている。スタンドには世界中の企業の看板が並び、世界経済の今を映し出している。

「BRICS」と呼ばれる新興国が目立つ。例えばブラジルでは食品会社のセアラ社が今大会からW杯のスポンサーに名を連ねた。次回W杯や6年後の五輪招致に成功するなど、スポーツ政治の面でも